

J20a            **MAXI、Swift、RXTE による MAXI J1409-619 の観測**

中島基樹 (日本大)、山岡和貴 (青山学院大)、山本堂之 (理研)、J. A. Kennea (PSU)、P. E. Kaaret (Univ. of Iowa)、T. Stromayer (NASA/GSFC)、他 MAXI チーム

2009年8月より観測を開始した全天 X 線監視装置 MAXI (Matsuoka et al. 2009) により 2010年10月17日に発見された MAXI J1409-619 の MAXI、RXTE、Swift 衛星による観測結果について報告する。

MAXI による発見直後 (Yamaoka et al. 2010; Atel#2959)、Swift 衛星による追観測が実施され、天体の位置が (RA, Dec) = (212.01068, -61.98340) と精密に決定された (Kennea et al. 2010; Atel#2962)。その後約1ヶ月半の間、この天体は 2-20keV のエネルギー帯域における X 線光度が「かに星雲」の約 2%以下 ( $\leq 20\text{mCrab}$ ) の状態にあったが、2010年12月1日に再び X 線増光が観測され、本予稿提出の時点までの間、約 40mCrab の X 線光度を保ち続けている。増光した際の Swift 衛星による観測の結果、約 506 秒周期の X 線パルスが発見されたほか、RXTE 衛星の観測データより  $\sim 0.22$ 、 $\sim 0.48\text{Hz}$  の QPO が発見された。また RXTE 衛星で取得された天体のスペクトルが、典型的な X 線パルサーのスペクトルを再現することが出来る cutoff-powerlaw モデルで表せることから、MAXI J1409-619 は X 線パルサーであると考えることが出来る。

本講演では、発見された MAXI J1409-619 の観測結果についての報告を行うほか、Supergiant Fast X-ray Transients (SFXTs; Ducci et al. 2009) との関連についての議論を行う。